希
のぞみ

希　05

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=14839087

ヒュンマ

ダイ大　ヒュンマ小説です。twitter/miya_haniwa555
本編が終わってから二年後にダイが見つかり、しばらく経った後のお話です。ヒュンマ、ポップ→←メルル、ダイレオ、アバフロ前提でお話が進んでいます。
◇マァム視点　◆ヒュンケル視点
ちょっと素肌でうにゃむにゃシーンがあるので改ページしています。
Pixivさまのtwitterリンクは驍泰アカにルーラします。

Table of Contents

希　05

◆

腕の中でマァムが泣き疲れて眠ってしまった……
男としてのオレは少しばかり残念に思うが、これから先の一生を共にする夫としては良かったと思う。
彼女にも悩みがあった。
当たり前のことだが、彼女が聖母や天使ではなくただの女性だとわかって安堵する気持ちもあるし、悩みを吐き出せる程に信頼されているという事実を知れて有頂天にもなっている。
くったりと安心して身を預ける彼女が愛おしくて、起こさないように抱き上げた。
寝台に横たえ、浴室の綺麗な湯でタオルを濡らし泣きはらしたマァムの顔を拭いてやる。
それから隣に滑り込む。
今までなら決してしない。以前のオレなら長椅子で眠りについただろう。
だが、夫婦になるというのが免罪符になっている。それに不安げな彼女が目を覚ました時に、安心出来るように抱き締めていたい。
やわらかくいい匂いのする身体。
……これは、天国の中の地獄かもしれない。
眠っている彼女に手を出すなど、あっていい訳がない。
腕枕をして、オレの腕の中で熟睡をする彼女を眺めた。長年地底魔城にいたオレは暗闇に目が慣れている。
ふっくらと膨らんだ蕾が、開花を迎える瞬間のようだ。芳しい香り、張りのある肌。
「……んっ」
彼女の小さな息が、静かな室内の中に響く。
耳をくすぐる甘い声。
オレの腕のいいところを探しているのか、マァムがもぞもぞする。そしていい場所を見つけたのか、オレの胸に頬を寄せるように

して満足げに笑った。可愛い。
　愛しい女性が、オレの腕の中で安堵して熟睡をしている。
　復讐を誓い、不死騎団を率いて戦いに塗れているオレに、将来こういう未来があると告げても一切信じないだろう。
　―――とりあえず、今のオレは長兄だ。
　そう心の中に強く訴えて、無理矢理目を閉じた。見つめたら、ずっと彼女の寝顔を見続けてしまうのが……自分でもわかっているから。

　◇

　なんだかあったかくて、いい匂いがする。
　父さんの腕の中で眠った時みたいな……でもその時よりも安心する匂いに満ちていた。
　とくとくと聞こえる鼓動。
「……ぅん？」
　ゆっくりと瞼を開けると、目の前に男性の喉仏。
　体が固まる。
　目線を怖々と上にあげていけば、銀の髪。
　淡い朝日に煌めいている。
　綺麗。
　うっとりと眺めてしまう。
「起きたのか？」
　眠っていると思った彼は起きているらしい。
「起こしちゃった？」
「いや、オレも目が覚めたばかりだ……時間はまだある。もう少し寝ろ」
　頭を撫でられる。

子供扱いに不機嫌になるよりも、ただただ大事にされていることが嬉しくて、くすぐったくて堪らない。幸せだな。
　ついつい擦り寄ってしまう。
　弱音を吐いて、たくさん泣いて……好きな人に甘やかされて……あまりの幸せに照れてしまう。腕の中に仕舞い込まれて、私は頭をぐりぐりと彼の鎖骨辺りに押し付ける。
　くつくつと笑うやさしい声。
「今日は……どうする？」
「レオナお薦めのお店とか場所に行ってみる？」
「夜景の綺麗な小高い丘、可愛い雑貨の売っている店、素敵なドレスを扱っている専門店……だったか」
「ヒュンケルって記憶力いいわね……アバンの書の時も思ったけれど」
「そうか？」
　自分を凄いと思っていない彼は、微かに首を傾げる。可愛い。
「……ドレスと言えば……」
　そう言って口を濁す。
「なあに？」
　見上げれば、ヒュンケルは苦笑を零す。
「オレの我が儘なんだが……丈の短過ぎる服や、肌が露出する服は止めないか？」
　目を瞬かせる。
「はっきり言えば独占欲なんだが、マァムの素足や素肌が他の男に見られるのは……妬ける」
　ひゃあ。
　頬を朱に染め、目線を逸らして言う様に声が出そうになる。
　この可愛い生き物は一体……
　はわはわとヒュンケルの可愛さに悶えていると、いつの間にか仰向けにされていた。
「可愛いな、マァムは」
　やさしく微笑まれてくちづけられる。
　ヒュンケルという檻に囲まれて、深く侵入される。窓の外から聞こえてくる僅かばかりの街の喧噪。早朝のやりとりに今が朝なのだ

と強く認識するが抗えない。
　角度を変えて自分を貪ってくる唇。
　宿屋の寝間着の上からゆったりと撫でてくる大きな手のひら。腰を触られるとなんだかくすぐったい。普段は晒していることの多い太腿を撫でられて、背中になにかが走る。
「動きやすい服を選べばいいが……だが、こんなふうに他の男に触れられるのは嫌だ」
「わかった！　今度からは容赦なく打っ飛ばすわ！！」
「……そうじゃない」
　私が元気よく答えれば、ヒュンケルがなんだか疲れたように言う。ヒュンケル以外に触らせなければいいのかと思ったのだが、違うようだ。
「度量が狭いと呆れるだろうが……おまえの素肌を、あまり他の男に晒さないでくれ」
「……へ？」
「服の好みを制限するつもりはないが……いや、制限しているな。だが、オレは、オレの妻の素肌が過剰に晒されるのは嫌だ。オレの我が儘、受け入れてくれ」
　わ　が　ま　ま。
「ひゃいっ！！」
　声が上擦った。
　そして首を上下に激しく振る。ぶんぶん。服なんて動きやすければいいと思っていたけれど、ヒュンケルがそう望んでくれるなら露出は抑える。決めた。
　ヒュンケルの我が儘か……可愛いなぁと思っていたら、なんだか胸元が涼しい。ヒュンケルが私を見下ろして、目を細める。欲を感じる色に鼓動が高鳴る。
「綺麗だ」
「へ？」
　寝間着の上着の袷を解かれ、晒されていた。無駄に大きな胸部が露わになっている。隠そうと手を動かす前に大きな手に触れられて、片側にはヒュンケルが吸い付いていた。
「……っ！？」

悲鳴が音にならない。
　眼前で銀の髪が朝日を浴びて煌めいている。赤い実を口に含んだ状態で見上げてくる目線。挑戦的な色に息を呑む。
「やわらかいな」
　ふにふにと揉みながら、ヒュンケルが舌で実を転がす。くすぐったい気持ちと小さな快楽。それよりも衝撃なのが、凝視をしてしまう程のヒュンケルの色気。あまりの艶に顔が真っ赤になり、背筋には悪寒に似た雷が走る。
「……ぅん……ぁ」
　小さな溜息みたいな喘ぎが口から零れて、マァムは自分の声に吃驚して唇を噛む。
（なに、今の声？）
「……あ、あぁ、んっ」
　変な声がまた出ちゃう。
　片方を摘ままれて、やさしく撫でられて、転がされて……もう片方をヒュンケルのあたたかい腔内でなぶられている。
　状況はわかるが、頭がついていかない。
「っひゃ！」
　内太腿を撫でられ、手がどんどん脚の間に迫っていた。逃げ出したい。でも身体が動かない。期待して動きたくない気持ちと、あまりのことに体が固まっているのと、混乱で、泣きそうだ。
「……嫌か？」
　嫌？
　動きを止める。
　嫌。……嫌？　首を傾げて自分の感情と向き合う。
　逃げ出したいのは恥ずかしいから。
　体が固まるのは初めてのことだから。
　混乱も、泣きそうなのも……全部。
「恥ずかしいの」
　小さく答える。
　こんな自分、自分らしくない……そう思うけど、今までの強気な自分が本当の自分だったのかと振り返ると、ある種作っていたところもあったのではないかと今更思う。

気丈でなければ挫けそうだった。
　強気でいないと泣いてしまいそうだった。
「でも、嫌じゃないの」
　優柔不断では魔の森では生きられない。
　誰かに頼るようじゃ戦えない。
　でも、今は……ヒュンケルは頼ってもいいって言ってくれた。
「……ならよかった」
　ヒュンケルは心底安堵したとでもいうような様子で息を吐き出すと、前を開いたままの私を胸に抱き込む。
　いつの間にかヒュンケルも前を開けていたので、素肌と素肌が触れあう。そのことにさらに顔面に血が集まる。もう耳まで真っ赤になっているだろう。
「もう少し眠れる……寝ろ」
　額にくちづけられる。
「え？」
「続きは夜にしよう。このまま続けてしまえば、出掛けられなくしてしまいそうだからな……寝るんだ」
　この状態で？
　お互い上半身裸に近い状態で抱き合って？
　出掛けられなくしてしまうって、なに？　なにするつもりだったの？
　目が白黒するというのは、今の状況のことを指すのだろう。
　素肌で抱き締められて、眠れる訳がない。
　弾力のいいヒュンケルの筋肉に包まれて、心臓は先程から働き過ぎで、そろそろ悲鳴を上げて壊れてしまいそうだ。
　ヒュンケルは微動だにしないが、寝てはいない。体や頭を撫でる手がやさしく動く。目の前の胸筋はやはり女性とは違って、柔らかいけれど、柔らかくはない。
　私ってば、何を考えているんだろ……
　マァムは開き直って胸に頬を寄せる。あたたかい身体。生きているんだなぁと嬉しくなる。生き急いでいた孤高の戦士が、今は親友も戦友もいて、穏やかに笑って私の傍にいてくれる。
　とくとくと聞こえる鼓動。落ち着く。

昨日から、まるで枯渇することを知らない泉のように、ヒュンケルを好きだという想いが溢れてくる。
　顔がにこにこと緩んで、彼の一挙手一投足で天から地底まで感情が起伏して、やさしい声に身体の中心から蕩けそうになる。
　恋って凄い。
　恋する女性が強いって聞いたことがあるけれど、感情全てが相手に操られているようなこの感覚を知ると、相手が期待するようになりたいと不思議なパワーが湧いてくる。
　本当にその気持ちが正しいのか、今の私にはわからないけれど……
　それにしても、先程のヒュンケルの色気は凄かった。色気の暴力だった。
　ひゃあ。
　思い出して焦ってしまう。
　顔が熱い。
　絶っっ対、私よりもヒュンケルのが色っぽい。同じポーズをしたとしてもヒュンケルのが艶めかしいに決まってる。
　女として悔しいという思いよりも、ヒュンケルにもそういう欲があるのだと知って、なんだかほっとしてしまう。
　彼も人間なのだ。禁欲的で克己（こっき）心に溢れ過ぎていて心配で仕方がない時が多かった。
　そして、自分にもそういう欲があることにも安堵した。
　お腹の奥がきゅうとするような、脚の間がむずむずするような、不思議な感覚。でも、嫌じゃない。自分も女なのだと実感した。
　振り返れば……私は動きやすさ重視で、人から見たらはしたない格好でいることが多かったのではないだろうか。
　武闘家として動きやすいのは鉄則だ。
　だが、ヒュンケルが戦場以外で上半身裸でウロウロして、あんな色気を振りまいていたら、心配で仕方がなくなる。
　彼の心配は今の私の心配と一緒なのだろう。
「……百面相」
　囁かれて、そして笑い声。
「夜のことが気になるか？」

色の籠もった声に「ち、違うっ！」とつい声を上げてしまう。
「ヒュ……ヒュンケルが色っぽいから心配だなって思っていたの」
「オレ、が……？」
　首を傾げた後、ヒュンケルが笑い出す。
　失礼な。事実なのに。
「私……ヒュンケルから見て、はしたない格好してた？」
「は？」
「ヒュンケルが、戦場みたいに上半身裸でウロウロしていたら心配だなって思って……」
　くっくっくっと懸命に堪える笑い声が耳を擽る。
　笑ってくれるのは嬉しいけれど、なんだか不機嫌になってしまう。
「むくれても可愛い」
　頬にくちづけられる。
「誤魔化さないで！」
「誤魔化してなんていないさ……はしたないというよりは、健康的な美しさだとは思うが、邪な感情を抱く者はそこら中にいるからな。ただ、結婚した女性がするには、少し刺激的だとオレは思う」
　頭を撫でられながらそう言われて、納得する。
　確かに結婚した女性と、未婚の女性では服装は替わる。ネイル村でも既婚者はあまり肌を露出していなかった。
　既婚者……その響きだけで脳天から湯気が出てしまいそう。
「……いや、ただどうしてもそういう服装のが好きというなら……」
「ううん。動きやすかったし、もらった物だから着ていたっていうのもあるから……今日のお出掛けで一緒に選んでくれる？」
　言って見上げれば、蕩けそうな程に甘い瞳で「ああ」と頷いてくれる。よくよく考えればロモス王国でもらった服や、ブロキーナ師匠にもらった服を自分はあまりよく考えずに着続けていた。動きやすかったし。
　あと、オシャレはちょっと苦手。
「ヒュンケルも着替える？」
「……お揃いにでもするか？」

笑って聞き返される。
お揃い……脳裏でお揃いの衣装を着ている自分たちを想像して笑ってしまう。それは彼もだったようで、くすくすと笑いながら頭を撫でられる。
「お揃いの……寝間着とかだったら欲しいかも」
「ああ、いいな……ところで、慣れたか？」
「へ？」
「素肌に」
短く言われて目を瞠る。
「……すっ？」
ついつい素っ頓狂な声が出てしまう。確かにちょっとだけ慣れていた。でも、今は……彼の目線が自分の胸部にいっていることを感じて「ひゃっ！」と変な声が出てしまう。
「綺麗だ……今夜はもう少し先に進むから、覚悟しておいてくれ。先に起きる」
ヒュンケルはそう言うと、寝台から下りて衝立の向こうへ行き、着替えを始めてしまう。布がこすれる音が響く。
「っひゃっっい！？」
返事なのか悲鳴なのかわからない声が喉奥から迫り上がってきた。私は寝台に猫のようにうつ伏せに丸まって、頭から毛布を被る。
衝立の向こうからまた笑い声が聞こえる。
「ばっ、ばかぁ！」
力ない罵倒の声は、ただただ虚しく室内に響いた。

◆

明日の朝には出発をする。
そのために旅の必需品を改めて用意する必要があった。ほとんど

の物はレオナ姫が用意してくれていたし、不足分は昨日の昼にほとんど購入出来ていたが……
「マァム……おまえの母上に渡すにはどんな物がいいと思う？」
「母さんに？」
　寝台で丸まって恥ずかしがっていたマァムは、空腹に耐えかねて寝台から下りてきた。どんな表情をすればいいのかわからないという思いが前面に出た、恥ずかし気な顔が本当に愛らしかった。
「恥ずかしがっているのも可愛いな」
　そう言ったら「ばかっ」と言われてしまった。解せない。
　―――まあ、誤魔化すために「ばか」と言う顔も可愛いので気にしない。
　朝食後に、暖炉の前で少しだけのんびりしてから買い物へ出掛けて来た。宿の予約は二泊三日。今日は一日この街で過ごすことができる。
　区画ごとに扱っている商品が違うようで、宿屋でもらった地図を眺めながら商業地区を見て回ることにした。露天の店も並んで、お祭りでもないのに賑わっている。
　旅の道具はほぼ揃った。
　後は……と考えて浮かんだのが土産物だった。これは目的地での必需品だろう。
「やはり、ご挨拶するなら土産は必須だろう？……人間界ではそうするのだと聞いた」
　ラーハルト、エイミとの旅の間に人間界での常識や一般的な知識をいろいろ教えてもらった。賢者とは魔法使いの上位職という感覚が強いが、彼女は職種の言葉通り博識でもあった。
「……挨拶」
　マァムはそう呟くと、頬を朱に染めた。
　結婚の挨拶だとわかっての反応だと思うと、それだけで気分が明るくなる。
「女性には花だというが……」
「枯れるわね」
「枯れるな」
　ほぼ声が揃って二人で笑ってしまう。

「母さんだったら、日常使いができるものがいいかも……」
「……日常使い」
　女性が日常使うものなど、よくわからない。
「櫛とかブラシとか手鏡とか……エプロンとか、あとは自分で好きな物を作るために綺麗な柄の布とかもいいかも」
　マァムがつらつらと上げていく。
　パプニカの王宮で働く女性と、ネイル村という小さな村で育ったマァムでは考えも違うのだろう。オレはマァムの感覚をもっと知りたい。
「本当は村の人、みんなにお土産買いたいけれど大荷物になっちゃうから、今回は母さんの分だけにしましょうか」
「そうだな、またルーラを使えるヤツに送ってもらう時に買えばいいか」
　脳裏に浮かぶ緑の衣服の青年は、心底嫌そうな顔をしていた。
「ポップだったら、すっごく嫌そうな顔して文句ばっかり言うわね」
「ああ、オレもそう思った」
　軽く言えることに自分でも吃驚する。
　マァムを任せられるのは彼だけだと思っていたオレ。裏返せば、それだけ彼のことを信頼していたということだ。一生懸命で感情に素直で、口は悪いが心根はとてもやさしい青年。
　今はもうポップにマァムを任せようなどとは思わない。もしもがあったとしても、今度はオレも正々堂々立ち向かうつもりだ。
　憂いなく、仲間のことを話題にできるというのはこんなに嬉しいのかとしみじみ感じる。それもこれも心の広い彼のおかげだ。

　＊　＊　＊

　肘鉄を懸命に食らわせながらも涙目で「悔しいけどお似合いだぜ！　マァムのこと絶っ対、幸福にしろよな！！」と声を掛けてくれた。勢いはあるがマァムに聞こえないような声音な辺り、彼の心

情を表しているようで申し訳ない気もするが、謝罪するのもおかしいので「無論だ」と応える。
「ヒュンケルは約束を絶対守るヤツだからな、安心だ」
「マァムと幸せになってね！」
　涙混じりのポップと笑顔のダイが声を掛けてくれる。
「世話の焼ける長兄と長女がくっついて、本当に良かったぜ！」
「ようやくって感じだよね！！」
　……意外とダイは容赦がない。
　苦笑いしか返せなかったので、次にはなんとかなにかを言い返したいものだ。

　＊　＊　＊

　整備され、綺麗な花が植えられた街並み。
　景観を意識して設計されていることがわかる。
　領主の館までの道は奇妙に曲がりくねっており高低差もある。一直線に進めないことから、防御に力を置いている領主が治めているのだろう。
「どうかした？」
「いや、よく考えられた街並みだと思ってな」
「攻めにくい？」
　小首を傾げられて、ああ、自分はそういう目線で見ていたのだと気が付く。軍団長目線でついつい見てしまう。
「ああ。この街はクロコダインの戦術がいいな」
「もうっ、真面目に答えないで。……でも、そういう目線で見る人がいてもいいと思うわ。レオナが聞いたら、新しい街を作る時にアドバイスして！　ってヒュンケルの仕事増やしそうだもの」
　マァムがくすっと笑う。
「私も、ついつい拳で壊せるかなって思う時があるし」
「そうか」
　目を丸めて、とりあえずそう言えば、「冗談よ」と声を上げて

マァムが笑う。可愛い。
「いや、オレもあの部屋に入って調度が固そうだなと思った」
　と素直に告げれば、マァムは口元に手を当てて軽やかな鈴の音のような声で笑う。
　そんなふうに穏やかに笑いながら、オレとマァムは、彼女の母親への土産を選んだ。

　初めて、母親と呼べる存在に贈り物を選ぶ……
　それはとてもあたたかくて、胸をくすぐる時間だった。

　彼女の母親が、オレという存在を許してくれるのか……
　娘の夫として認めてもらえるのか……オレは、力では拭うことのできない不安を久し振りに感じていた。

「ヒュンケル？」
　突然黙ったオレを見上げて、マァムが首を傾げる。
「どうかした？」
「いや……」
　口にするにはなんだか情けない悩みのような気がして、つい口を噤んでしまうが……だが、これではいけないと「マァムの母上に、オレは認めてもらえるだろうか」と情けなさに目線を逸らしながら告げる。
「え？」
　するとマァムは目を見開いて、吃驚した顔をする。
「やだ……絶対、大丈夫よ。私が決めた人だもの。どんな人でも絶

対に母さんは受け入れてくれるわ」
　どれだけ信頼されているのか……
　だが、思い返せば……オレだって父さんやモルグが反対する姿など想像もできない。
「そうだといいが……」
「ふふ。反対にヒュンケルが心配されるわよ。こんなお転婆でいいのか？ って……」
　お転婆？
　大魔王バーンに挑む娘がお転婆で済んでしまう母親の感覚についつい笑ってしまう。
　くすくすと笑うマァムが愛おしくて、彼女の肩を抱く。
「ああ、オレはそのお転婆がいい」
　心の底からそう思って耳元で言えば、マァムは頬を朱に染めて「……ありがとう」と満開の花のように笑った。

おしまい